

「ちゃぶ台次世代ステップアップ研修（第4回研修会）」開催要項

1. 趣 旨 現職教職員、教職志望学生や教育関係者等が、学校や地域の教育諸課題の解決に向けた講義、課題研修やピア・サポート等を行うことにより、教職実践課題の解決力や省察力の向上を図るとともに、ステージ各期の教職員や学校組織を牽引できるリーダーとしての資質能力の向上を図る。

2. 主 催 独立行政法人教職員支援機構山口大学センター
山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻（教職大学院）
山口大学教育学部

3. 共 催 山口県教育委員会・山口市教育委員会

4. 開催日時 令和8年10月24日（土）13：00～17：00

5. 開催場所 山口大学教育学部「21 番教室」（講義棟2 階）他
〒753-8513 山口市大字吉田 1677-1 Tel:083-933-5300

6. 参加者 学校等に勤務する教職員、教職志望学生、大学教職員や教育関係者等

7. 研修内容

【Session I】

(1)開会行事

挨拶 教職員支援機構山口大学センター センター長 和 泉 研 二

【Session II】

(2)ちゃぶ台協議

深め合い 「興味・関心や問題意識に基づく素朴な問いをもとに「問い」や「課題」を！」

【Session III】

(3)講義（演習）

テーマ 「探究が生み出す価値創造と学校改革
～「サバ缶、宇宙へ行く」と学校づくり～」

講 師 福井大学大学院（連合教職大学院）教授 中 森 一 郎 さん
（元 福井県立若狭高等学校 校長、前 福井県教育庁 学校教育監）

【Session IV】

(4)閉会行事

コメント 山口県教育庁教職員課 管理主事 前 田 将 太
挨拶 山口大学教育学部・教育学研究科 学部長・研究科長 中 田 充

8. 「感染症法（感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律）」にもとづく取扱（お願い）

- (1)本研修の実施においては、主催者として、「感染防止の5つの基本(厚生労働省 ADB,2023.3.8)」による感染予防に努めるとともに、受講者一人一人に感染防止に向けた責任ある行動を求める。
- (2)研修地域や受講者居住地の感染状況や推移、研修関係者の意向等をふまえて、研修形態を「対面・参集型研修」から「オンライン研修」等に変更する場合がある。

9. その他

- (1)本研修事業は、独立行政法人教職員支援機構地域センター（山口大学センター）事業経費により運営される。
- (2)本研修事業では、参加者に対する保育サービスとして、資格所有者による「託児サービス（一時預かり）」が提供される。提供時間は研修行事前 30 分から行事後 30 分とする。

山口大学吉田キャンパスの構内図（教育学部棟への移動経路等）



if you want to go fast, go alone.
if you want to go far, go together !
早く行きたいば一人で進め 遠くまで行きたいばみんなで進め



ちゃぶ台次世代ステップアップ研修講座
(ちゃぶ台次世代コーホート)「学級(会員)通信」
No.2 2026.9.9
NITS 山口大学センター・山口大学・山口県教育委員会

それでんよか、そのままでんよか.....

なんでしょう... この「あったかい」「ほわっとした」感覚...

なんでしょう... なにか「新しい自分が、ふわ〜っと降りてきた」感覚... 「校長ちゃん」のせいかな？

夏休みも終わりに近づく 8 月 22 日午後、第 2 回研修会を開催しました。現職教員(25)、教職大学院学部卒院生(15)、教育学部生(4)、高校生及び保護者(8)、県教委(1)、県立大学教員(1)、山口大学教職員(15)、講師(1)に託児スタッフ(3)を加えて総勢 73 人が集まりました。

今回はこの日の午前に開催された県教委「高校生のための教職セミナー」の参加者もお誘いしました。おかげで、とっても華やか、賑やか、新鮮な研修会になりましたが、中身は自身の知識を高め、品性を磨き、人格形成を高める...なんだろう「修養」といった一日。サイコウでした！

開会あいさつ

教育学部・教育学研究科の中田 充 学部長・研究科長の挨拶に続いて、参加してくれた高校生を紹介しました。会場中に広がる「温かい歓迎の拍手」に高校生たちも嬉しそう(^^) あったかい「学び合いのコミュニティ」... ザ・「ちゃぶ台」です！



講演 教育的愛情と子どもたちへの関わり ～それでよか、そのままでよかの心～

学校法人立花学園立花高等学校 校長 齋藤 真人 さん

今回の講師は、TV や新聞等でお馴染み(^^) あの「伸ばすを大切に学校」立花高等学校の齋藤校長先生に来ていただきました。

宮崎県の公立中学校教員から立花高等学校へ。教頭を経て 2007 年から校長先生です。生徒の 8 割が不登校経験を持つ高校の自立支援の教育方針は全国からも注目の的。文部科学省「不登校に関する調査研究協力者会議」委員でもあって。

「それでよか」の共感的理解の大切さを、笑顔でユーモアを交えながら力強く説かれる齋藤校長先生。出会えたことに感謝でした。ありがとうございました。

※ 事務局の心にズキンズキン響いたフレーズを勝手に「語録」にしてみました。すみません！

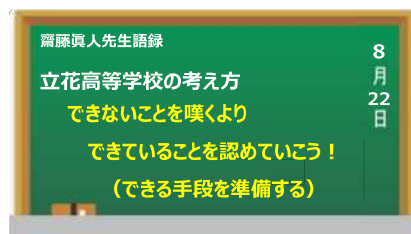


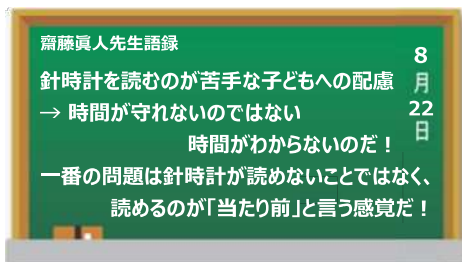
参加者のコメントから

齋藤先生のお話を聞きながら、今年度、自分が授業や校内研修の中で大切にしている「子どもを見とる」ということについて、改めて考えました。

今年度は、「つながりの中で学びを深める子どもの育成」という校内研修の研究主題のもと、私自身も「子どもがつながりの良さを実感できる授業」を個人テーマとして、子どもの姿から授業を考えることを意識しています。教師が学びを決めすぎるのではなく、子どもが何を考え、何に困り、誰や何とつながりながら学んでいるのかを丁寧に見とりたいと思っています。

特に心に残ったのが、「学校がよかれと思ってやることは大体外れることがある」「経験値で考えるから、目の前にいる子どもが見えなくなる」というお話でした。経験を積むことはもちろん大切だと思いますが、経験が増えるほど、「以前のこの子と似ているから」「こういうときはこうすればよい」と、これまでの経験をもとに子どもを見ることが増えているように思います。それは必要なことでもあるけれど、自分の中にある「子どもってこういうもの」「学校ではこうするもの」という当たり前に、目の前の子





どもを当てはめてしまうこともあったと感じました。

だからこそ、「どうしたの?」「どうしたいの?」「私はどうすればいいかな?」と本人に尋ねること、本人がどうしたいかを自分で決めることを大切にするというお話が印象に残りました。私はこれまで「見取り」というと、教師が子どもの姿を丁寧に見て、考えていることや困っていることに気づくことをイメージしていました。でも、いくら丁寧に見ても、それは結局教師側から見た子どもの姿です。子ども自身が今ど

う感じているのか、どうしたいのかを本人に聴くことまで含めて「見とる」ということだと感じました。子どもたちがどうしたいと思っているのかが何よりも大事だと改めて感じました。今年度大切にしている「見取り」について、もう一度考えてみます。

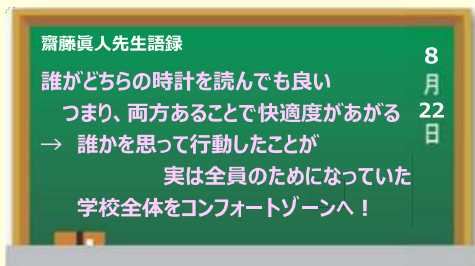
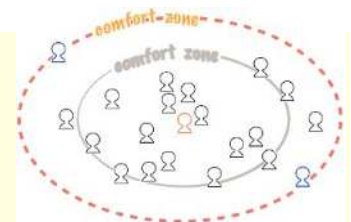
また、「介入型支援」ではなく、子どもが必要としたときに手が届くところにいる「伴走型支援」という考え方も、自分が授業で大切にしたいことと重なりました。子どもが困っていると、つい教えたり、困らないように先回りしたり、教師がよいと思う方向に導いたりしたくなります。でも、それによって子ども自身が考えたり、選んだり、誰かとつながって解決したりする機会を奪ってしまうこともあるのだと思います。授業でも、教師が子どもを「つなげる」のではなく、子ども自身が友達や既習の学び、生活経験等とのつながりを見つけ、その良さを感じられるようにしたいと今年度考えているので、伴走型支援という考え方を大切にしていきたいです。

「しんどい/しんどくない」「できる/できていない」「得意/苦手」のように、「当たり前」を境に二分しないというお話も印象に残りました。同じ教室にいても、考え方も、学び方も、人との関わり方もそれぞれ違います。「みんな同じようにできること」を求めるのではなく、それぞれ違うことを前提に、その子なりの方法で学んだり、人とつながったりできる教室にしていくことが大切なのではと思いました。事前課題で自分が書いた「いつも全体で合わせて、一緒に行動しなければならない」「ずっと座っておかないといけない」といった私自身が感じていた学校のしんどさも、学校の中にある「当たり前」から生まれていたと思います。「それでよか」という言葉は、まずは目の前のその子を、自分の「当たり前」で判断せずに受け止めることだと感じました。「将来のその子のために」と考えて頑張らせることも必要だと思いますが、「今日のその子のためにできること」を考えること、「100回の頑張れ」よりも「よう頑張るとる」と今の姿を認めることも大切にしたいです。自分自身も、頑張らせてくれる人より、分かってくれる人がいることで頑張れたことがあったと思いました。今もそうだなと思います。



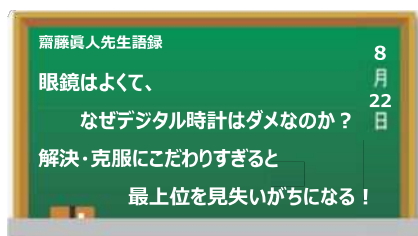
今年度大切にしている「つながり」や「見取り」も、教師がよいと思う学び方や人との関わり方をつくって与えることではないのだと思います。一人ひとりをまず「それでよか」と受け止め、その子が何を感じているのか、どうしたいのかを知り、そこから一緒に考えていくことが大切なのではないかと感じました。今回のお話は、自分が今年度大切にしていることとつながる部分がたくさんありましたが、一方で、「子どもを見とる」と言いながら、自分の経験や当たり前を通して子どもを見ていなかったか…ということも考えました。目の前のその子を見るということについて、これからも考えていきたいです。(小学校)

私たちがこれまでやってきたことは、本当に子どものためになっていたのかと考えさせられた。「当たり前と思っていないか」といった問いかけが何度もあったが、「恥ずかしながらそう思っていました・・・」という思いになることもあった。不登校の子どもへの対応はこれまでも行っていたが、それは学級の中ではほんの一部であり、その子への特異な支援であったと認めざるを得ない。学級経営も部活動指導においても「私より公」という信念を掲げて統率することも多かったように振り返るが、そこに「しんどさ」を感じる子どもがいることについても考え直す必要がある。教師がどのような構えているかは非常に重要である。



「2つの時計」の話もあったが、私としてはまずコンフォートゾーンを学校全体へ広げていくことを意識してやっていきたいと思った。齋藤先生が話されるエピソードを聞いて涙が出そうなこともあったが、教師の人間性が子どもや保護者の心を耕すところが大きいと感じたし、その逆の方向性も生まれると感じた。今回の学びを同僚にも伝えていきたいが、全ての教職員に直接聞いてもらいたいと思える素晴らしい講演であった。(中学校)

通常の学校教育では、「みんな同じであること」を求めてしまう場面が少なくない。しかし、同じ中学生であっても、一人ひとり個性や特性が異なるのは当然である。苦手なことに対して個別の支援を行うことも必要だが、それ以上に、一人ひとりのよさや得意なことを認め、それを伸ばしていくことが重要なのではないかと感じた。「できないことをできるようにすること」が教育の役割の一つであるとすれば、「今できていることをさらに伸ばすこと」もまた、教育の重要な役割である。教育現場が、子どものできないことだけに



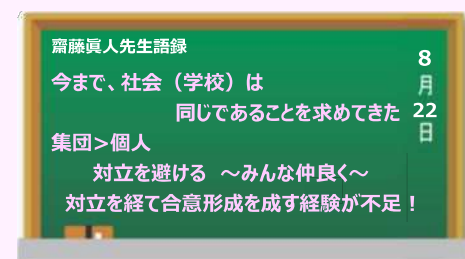
目を向けるのではなく、それぞれの強みや可能性を見つけ、伸ばすことにより多くの力を注ぐことができれば、その環境で育った子どもたちは、将来、自分自身の「できないこと」ではなく「できること」に目を向けられるようになるのではないだろうか。そして、自分とは異なる個性や特性をもつ人を認め、多様な人々がともに生きる社会の形成にもつながると考える。

子どもが育った環境や、そこで得た経験の積み重ねは、将来の価値観や他者との関わり方に大きな影響を与えるのではないだろうか。だからこそ、学校教育においては、子どもを一つの基準に合わせるのではなく、一人ひとりの可能性や強みを認め、それぞれのペースで成長できる環境をつくることが重要であると、今回の講演を通して改めて感じた。(中学校)

特に心に残ったのは、アナログ・デジタル時計の例えに代表される「時間」に対する概念の揺さぶりでした。私たちは無意識のうちに「時間を守ること」や「学齢期に合わせて進学・復帰すること」を当たり前として捉えがちです。しかし、「周りから遠回りに見えても、その子にとってはそれが最短」「スタートできる日がその子のスタートラインであり、できなかった日は今日がその日ではなかっただけ」という言葉に、視界が開ける感覚を覚えました。人生の時間を他者の物差しと比較する必要はなく、1年や2年の遅れを焦る必要もない—そう考えることで、これまで「不登校」や「立ち止まり」として捉えられていた時間が、その子に必要なプロセスへと意味づけし直されました。

もう一つ深く腑に落ちたのは、運動会の練習の例に象徴されるように、齋藤校長が規律や集団行動そのものを全否定しているわけではないという点です。問題は「それしか選べないこと」にあり、本質は「選択肢があるかどうか」にあります。「みんな同じ」や「一致団結」が息苦しさを生む多様性の時代において、立花高校のような存在は、社会の理不尽に晒される子どもたちの安心安全な「コンフォートゾーン(避難所)」として欠かせないものだと実感しました。

「それで、よかよか」という言葉には、教育現場に必要な包容力が凝縮されていました。「それで」という条件なしの受容と、「よか」を重ねる温かい響きが、子どもだけでなく大人をも義務感から解放してくれます。「自立とは1人で何でもできることではなく、人に迷惑をかけ(頼り)、誰かの得意に助けてもらうこと」。このメッセージを胸に刻み、子どもたちが困ったときにいつでも手を伸ばせる伴走者でありたいと感じました。私も現場で子どもたちに提示できるような、自分自身の軸となる「魔法の言葉」を探し続けていきたいと思います。(中学校)



福岡県の立花高等学校の「校長ちゃん」のお話を聞いて、日頃の自分の指導や考え方について深く考えさせられた。どうしても生徒の「できないこと」に注目しがちだ。それをできるようにすることが支援だと思い、「ちゃんとしなきゃ」「しっかりしなきゃ」「頑張れ」と言ってしまうなど思う。



教員自身はこれまで色々なことが圧倒的にできてきた側なので、それを当たり前・前提にして話し、行動しがちである。確かに規律や「みんなと同じようにできること」も大切なものかもしれないが、それが生徒を苦しめることもあるということを、自覚して仕事をしないといけないと感じた。

また、私たちがぼんやりと思っている「普通」の定義があり、そこから外れていると「変わっている」「変だ」「足りない」となってしまう。「普通って何?」と疑ってみることが大事だと思う。そして、できないことではなく、生徒の「できる部分」「できるようになってきたこと」に焦点を当てていきたい。

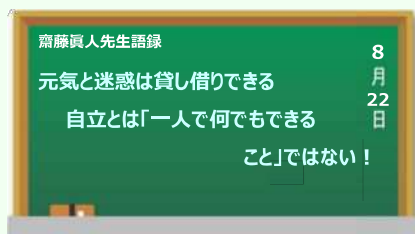
この状況を変える可能性があるのが「探究的な学び」ではないかと思う。

それぞれの学び方や、自分が本当に興味を持つ問いを見つけた時、生徒は自分で走り始める。教員が通ってきたことのない道を生徒が歩み始める。それが良い方向に働いてくれればいいと思う。

探究な学習は、与えられた「みんながやりそうなこと」では意味がないし、面白くない。独自の視点や、本当に自分の興味・関心に基づいたもの、自分の生き方やあり方と結びついた学びこそが面白いと感じる。子どもたちが自分でどう歩むか考え決断をする機会がたくさんある。そういった学びの機会が増えるといいなと思うし、そういう場をたくさん作ってきたい。

ただ、「それでいいよ」と受け入れるだけでなく、やはり目標は掲げる必要があるのかなと思う。その目標に向けて生徒が前進できるように、環境を整えたり支援をしたりしていくことが必要なのだと感じた。(高等学校)

講演を通して特に印象に残ったのは、「得意なこと、不得意なこと、全てひっくりめて自分は自分だからよか」という言葉である。自分を含め、多くの人は他人と比較したり、社会に合わせようとしたりする中で、不得意なことに目を向け、「もっと頑張らなければならない」と考えてしまう。しかし、この言葉を聞いたことで、不得意な部分だけではなく、自分ができていることや自分自身の良さにも目を向けてみたいと思うようになった。また、「～しなければならない」「そうするのが当たり前」という考え方についても考えさせられた。何かを「当たり前」としてしま



うことで、それができない人を必然的に「異例」としてしまい、できない理由を言いづらい環境をつくってしまう。できないことを嘆くのではなく、まずできていることを認め、その上で「どうすればできるようになるのか」「どのような工夫をすればできるのか」を考えることが大切なのだと感じた。

特に、時代とともに新しいものや便利なものが生まれる一方で、その変化によって必ず「少数派」となる人が生まれるという話が印象に残った。たまたま集団の特徴から外れているだけなのに、それを「できない」と認定してしまうのではなく、こちらから歩み寄ることが必要である。多数派の人たちが作った「当たり前」を少数派の人たちに一方的に求めるのではなく、異なる可能性を残しておくことが、誰もが生きやすい環境につながるのだと思う。また、「皆仲良く」という考え方についても、たまたま同じクラスになっただけの人たちに同じであることを求める必要はなく、学校は人との関わり方や、その中で自分のやり過ぎ方を学ぶ場所でもあるという考え方が印象に残った。(ストマス院生)

今回の講演で、「頑張れ」という言葉の受け取られ方について考えました。私は共感よりも問題解決策を考えて伝えてしまう癖があります。しかし、今回の講演で「頑張ってるね」の一言があるだけで、かけられた人の心が少しでも温かくなることを知ることができました。今後はそういった何気ない一言をかけるよう心がけていこうと思いました。そしてそれを自分の当たり前にしていこうと思います。

また、生徒が立ち上がった時に賞賛されるべきなのは「本当は生徒」という当たり前に聞こえて、実際は「支援した周りの人」を賞賛してしまう現状を聞いてはっと気付かされました。分かっている、目を向ける方向を間違ってしまう世の中を変えたいなと思いました。加えて、同調圧力や正常性バイアスをなくし、生徒の求める支援ができるよう、生徒一人一人に向き合い、しっかり会話をしていこうと思います。(ストマス院生)

立花高等学校の齋藤真人先生のご講演を聞き、自分自身が持っている「当たり前」という考えに気付くことができました。また、その「当たり前」という考えによって、誰かを「当たり前ではない」存在として区別し、排除してしまう可能性にも気づきました。

特に「時計が読めない子」のエピソードで「ここにいるみなさんはいつから時計が読めるようになりましたか。」という先生の問いかけにハッとさせられました。私は自分自身が記憶に残るほどの経験をせず、「時計を読む」という一つの大きな成果を得ていたことに気付いていなかったからです。

これから教員になるにあたって、「当たり前」という線引きで子どもを見るのではなく、一人ひとりの本当の困り感や苦勞、頑張りに気づき、「頑張っているよ」「よかよか」という言葉をかけられるような教員になろうと思いました。

(学部生)



ちゃぶ台協議(対話) 自分への問いかけと明日からの自分

講演終了後は、「自他との対話」の時間です。今回研修会のMCは小杉進二先生。「宿題(事前探究課題)」や齋藤校長先生のお話を元に、学びの整理、省察、開示と共有、新たな気づきと今からの自分等々についてじっくりと考える時間でした。



2.【個人リフレクション】3つの問い(10分)

①心に残ったフレーズ

齋藤先生のお話の中で、最も印象的だった言葉やエピソードと、なぜそれが心に留まったのかを書き出してみましょう。

②「当たり前」の見直し

事前課題で考えた、学校の中で感じていた「しんどさ」と、本講演の内容を結びつけ、「学校の当たり前」が生み出す「しんどさ」について考えてみましょう。

③「それでよか」からの問い

②の問題を、「それでよか」のまなざしから見直してみましょう。新たな方向性が見出されるかもしれません。

参加者のコメントから

ちゃぶ台協議での対話を通じ、自分の中に「できないことも、できるまでやればできる」という精神論的

な当たり前が無意識にあったことに気づくことができました。でも実際の現場では、努力だけではどうにもならない壁や、一人で抱え込んでしまう困り感が必ず存在します。大事なことは、できないことを根性で克服させることだけではなく、困ったときに「助けて」と素直に言えるような安心感のある環境を、日頃からクラスの中に作っておくことだと考えました。これは生徒に対してだけでなく、同僚の先生方との関係でも同じだと思います。自分一人で問題を抱え込まず、教員同士でも、教師と生徒の間でも、お互いに頼り頼られる関係を作っていきたいです。誰もが自分の弱さや「できないこと」を素直に認め、安心して周囲に頼れる学級づくりを目指して、これからに活

3.グループ対話:「共有」と「共感」による深め合い(25分)

目的: 事前課題と個人のリフレクションでの気づきを温かい場で共有・共感し、多様な視点からの学びを深めます。

<対話のルール>

- 傾聴と受容 : 解決策の提案や助言ではなく、ありのままの思いを聴き・受け止めます。
- 守秘義務の徹底 : ここで話された内容は場の中に留めます。
- 「バス」の尊重 : 言いたくない内容は無理に話さなくて大丈夫です。
- 仲間の尊重 : 一人3分程度、みんなが等しくお話できますように。

4.「もう頑張っている、あの人に贈る言葉」の作成(10分)

活動のねらい

- 個人によるリフレクションとグループでの対話を通して湧き上がった想いを受け、「もう頑張っている、あの人」への具体的な言葉や行動を書き留めます。
- 今の思いを「感想」で終わらせず、温かいまなざしとそれに基づく行動をあなたの日常に持ち帰るための機運とします。

お手紙に記載する2つの要素

- 相手や自分にかける承認の言葉「それでよか」「いつもありがとう」といった存在を認めるメッセージ。
- 明日からの小さな一歩無理なく今日・明日から始められる具体的に小さな行動目標。

かしていきます。今回、自分の価値観について深く考えさせられ、自分がしんどかった時に支えてくれた家族や地域の方々、先生方のありがたさを再認識することができました。ありがとうございました。(ストマス院生)

協議の中では、学生への質問の中で印象的だったのは、同調圧力を感じている場面もあったのになぜ先生になろうと思ったのかということである。集団や学校、社会に違和感があっても潜れる人と潜れない人に環境的な差があるとしたら何なのかという問いにたいして、答えは出なかったが考え続けるべき視点だと思った。

現職の先生の話の中では、半径3mの話で、やはり自分の課題やもやもや感と一緒に、目の前に生徒がいていろんな人と関わりながら教育をしている中でどこまでが自分たちの影響領域として仕事をするかという悩みやある種の無力感は共通したもやもやとしてあった。

この点についても答えは出ていないが、答えのない問いをそうだよねと言って一緒に考え続けてくれる人がいることも、居場所としてはとても重要なのだろうと講義と協議を通して思った。(高等学校)

閉会行事と諸連絡

教育庁教職員課の松嶋 渉班長さんから、「ちゃぶ台」や高校生を含む参加者全員に対する温かいメッセージをいただき、熱気溢れる研修を終りました。ありがとうございました。

次回は10月24日の午後です。

お待ちしております。(事務局)



山口大学「ちゃぶ台」公開セミナー (オンライン講座)

山口大学(教職大学院・教育学部)が、山口県教育委員会、教職員支援機構(NITS)とともに、年間10回の連続講座として実施している教職員研修講座(ちゃぶ台世代サポート)の一部を公開します。

第1回 2026.7.29(木) 15:00~16:00	「山口県の地域連携教育の成果・可能性」(地域連携教育の調査から) 山口大学教職大学院 講師 小杉進二 https://forms.gle/16d1e6niP1UhdCM19		
第2回 2026.10.14(水) 13:00~16:10	「子どもと自分を幸せにするウェルビーイング」(共生社会を創造する私たちとして) 山口大学教職大学院 教授 和泉研二 山口県ひとづくり財団県民学習部 参事 浅原正和 https://forms.gle/JJb0b5ZF8bv799UPA		
第3回 2026.10.21(水) 15:00~16:00	「子どもたちの世界に見える構図から」(人権教育の視点から) 山口大学名誉教授 教育学部 教授(特命) 霜川正幸 https://forms.gle/vGyVzTV6CtLhqmFv5		

・参加を希望される方は、各回の二次元コードを読み込んで、入力(申込)をお願いします。
・参加申込は、いずれの回も「実施日の7日前」が締め切りとなります。お早めにお申し込みください。
・ご質問、ご要望等ございましたら、「ちゃぶ台世代サポート」事務局(霜川正幸)までお知らせください。
m-shimo@yamaguchi-u.ac.jp

「ちゃぶ台ルーム(託児サービスの実施会場)」は7人のかわいいキッズたちが元気イッパイ! 賑やかでした! 託児スタッフの佐々廣子先生(防府市教委)、西山 結さん、西村七海さん(教育学部3年)、ありがとうございました。

令和8年度「ちゃぶ台次世代コーホート」について

NITS山口大学センター研修プログラム名 「ちゃぶ台次世代ステップアップ研修講座」

主催：山口大学（教育学部・大学院教育学研究科・NITS山口大学センター） 共催：山口県教育委員会・山口市教育委員会



自主的・自発的に学び合う中で、自身や仲間や学校に向き合い、
これからの教育や実践を協働・創造していける
温かく、連帯的な「学び合いのコミュニティ」を創っていきましょう！
「みんなを誘いたくなる研修」 多くの皆様のご参加をお待ちしています。

「ちゃぶ台次世代コーホート」、「同 Advanced course」とは



- ・教職志望学生、現職教員、大学教職員、教委関係者や多様な教育関係者が、
自主的・自発的に集い学び合う「教員養成・研修の一体化」プログラム
- ・自分自身、自らの教育実践や多様な教育課題を理解し、改善・解決をめざす
仲間（コーホート）として、「対話・省察・気づきを大切に学び合う」プログラム
- ・広く「県内外に公開」し、6～2月の偶数月、土曜日に行う研修会を中心に、大学教員によるセミナー等も加えて提供するプログラム



令和8年度の計画 めざす姿と前年度からの変更点

自主的・自発的に学び合う中で、自身や仲間や学校に向き合い、これからの教育や実践を協働・創造していける、温かく、連帯的な「学び合いのコミュニティ」を創っていきたい！



変更点

開始時期

大学としての卒後ケア（初任者、臨時的任用教員のフォロー、還ってくる場の提供）や学生の意識向上、キャリア形成支援を強化する
→「コーホート」の開始時期を昨年度までの10月から6月に早める

負担軽減

全ての参加者の「参加しやすさ」「学びやすさ」を大切に、プログラムの日程、回数や方法等を変更する
→「半日日程」を基本とし、一部を「ハイブリッド」公開セミナー型にする

研修改善

知識習得型（課題対応等）研修と「ちゃぶ台（対話・省察と気づき等）」を効果的に組み合わせる＋参加者同士の「つながり」の醸成を重視する
→予算削減に対応＋「受け取る」から「相互に揺さぶる」感覚を楽しむ

3

令和8年度の研修行事の計画（予定）

第1回 6月20日（土）9:30～16:30

- ① 山口県教育委員会の本年度の重点施策、プロジェクト
教育庁教育政策課 班長 灘 貴之
- ② 私の教職キャリア、教育に対する思い ～ 教職をめざす学生たちとの対話 ～

第2回 8月22日（土）13:00～17:00

- ① 教育的愛情と子どもたちへの関わり ～ それでよか、そのままでよかの心 ～
学校法人立花学園 立花高等学校 校長 齋藤真人

第3回 10月24日（土）13:00～17:00

- ① 探究が生み出す価値創造と学校改革
～ 「サバ缶、宇宙へ行く」と学校づくり ～
福井大学 教授 中森一郎
(前 福井県立若狭高等学校 校長)

山口県教育推進の手引き
未来を拓く たくましい「めざでっ子」の育成



令和8年度の研修行事の計画（予定）

特設 11月8日（日）9:00～17:00

① 「山口大教育フェス2026」への参画

個人・グループや学校単位の実践・研究の発表、報告やブース出展

区分1 子ども（幼児・児童・生徒）向けの体験活動ブース

区分2 教職員、教職志望学生、教育関係者や一般大人向け演習・講座ブース

→ 「ちゃぶ台」に参加する教員、学生や教職大学院生は発表・出展等で参加

→ 学校関係者（教職員等）は、誰でも発表、報告やブース出展が可能（歓迎）

第4回 12月26日（土）13:00～17:00

① 包摂を実装する学校づくり

～ 境界を問い直し、共に学ぶ教育の形を探究する ～

広島大学 准教授 南浦涼介

令和8年度の研修行事の計画（予定）

第5回 2月6日（土）13:00～17:00

① トップセラーは「顧客の幸福と車の未来」をどう描こうとしているのか

山口マツダ株式会社 営業部門担当

② 保護者は「子どもの成長と学校・地域の未来」をどう描こうとしているのか

山口県PTA連合会役員（保護者との対話）

公開セミナー

○ 7月29日（小杉）、10月14日（和泉）、10月21日（霜川）

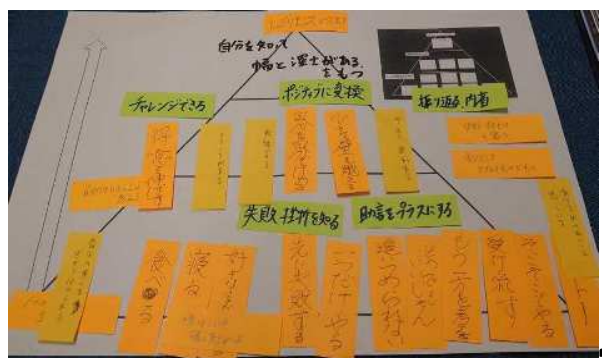
15:00～16:00に実施予定

○ 山口県の教育課題に関するテーマについて、
教職大学院科目担当（小杉・和泉・霜川）が企画・実施

○ 教職大学院の授業に参加するイメージの公開講座として、平日（水曜日）午後、
山口大学を主会場に実施する。

参考資料

令和7年度の概要報告



「ちゃぶ台次世代コーホート」、「同 Advanced course」の令和7年度の様子

参加者（登録者）

公募により自主的・自発的に参加した現職教員 28

教職大学院に在籍する現職教員 16

教職大学院生（学部卒院生） 14

県教委とやまぐち総合教育支援センターの指導主事・研究指導主事 3

県内市・町教委の指導主事 4

山口大学教職員 22 計 87 人 + 託児スタッフ 3 人



参加者数（延べ数）

10回の研修行事に参加した者 計 721 人



「ちゃぶ台次世代コーホート」、「同 Advanced course」の令和7年度の様子

第1回 6月14日(土) 13:00~17:00 山口大学

- ① 山口県教育の重点と教育予算ができるまで
教育庁教育政策課 班長 瀬 貴之
- ② 山口県地域連携教育の現在地とこれから
教育庁地域連携教育推進課 班長 一島 圭



第2回 8月23日(土) 13:00~17:00 山口大学

- ① 初任・若手教職員の成長を支えるために
岐阜県大垣市立興文中学校 校長
前 西濃教育事務所長、岐阜大学准教授 日比光治



第3回 10月4日(土) 9:30~12:30 山口大学

- ① 道德教育の推進とミドルリーダー
香川大学大学院教育学研究科
教授 清水顕人



「ちゃぶ台次世代コーホート」、「同 Advanced course」の令和7年度の様子

第4回 10月4日(土) 13:30~17:30 山口大学

- ① 集団・学級づくりの面白さと教員としての関わり
香川大学大学院教育学研究科 准教授 大西美輪



第5・6回 11月30日(日) 9:30~16:30 山口大学

「山口大教育フェス」への参画(来場者574人 協賛・出展企業 Google、NHK for school等10社)

- ① 会員(現職教員)による実践・研究発表やブースの出展
(「ちゃぶ台次世代コーホート」からの発表等 7点)
- ② 命のミュージアム in 山口大学(コーホート企画として出展)
グリーフサポート山口 代表 京井和子



「ちゃぶ台次世代コーホート」、「同 Advanced course」の令和7年度の様子

第7回 12月27日(土) 9:30~12:30 セントコア山口
行列ができるかも?の学校法律相談NITS-Café

① 学校の教育活動を法務の視点から探る

いたむら法律事務所 弁護士 藤村亮平



第8回 12月27日(土) 13:30~17:00 セントコア山口

保護者と交わり・学び合うNITS-Café

① 保護者との対話をとおして考える

山口県PTA連合会役員他

第9・10回 3月14日(土)

10:30~17:00 山口大学

① 1年間の教師としての成長を振り返る

② これからの教育と若手教員への期待

萩市教育委員会 教育長 池田廣司

